

館林市埋蔵文化財発掘調査報告書 第14集

館林市埋蔵文化財分布調査報告書(3)

BUNPU-CHOSA

1986

館林市教育委員会

例　　言

1. 本報告書は、館林市内全域を対象として行う分布調査の第3年次の、調査結果をまとめたものである。
2. 本年度の分布調査は、五ヶ年計画の第3年次にあたり、市内の西部及び北部を中心実施したものである。
3. 本分布調査の主体は館林市教育委員会、担当主管は文化振興課文化財保護係である。
4. 調査の期間は、昭和60年4月～昭和61年3月までである。
5. 調査に伴う費用は、国庫・県費補助により館林市が負担した。
6. 調査にあたり、調査協力者として、次の方々に協力をお願いした。感謝いたします。
小島敦子・岩崎泰一・徳江秀夫・鹿田雄三

本　文　目　次

例　　言	1
本　文　目　次	1
図　版　目　次	2
写　真　目　次	2
第Ⅰ章　調　査　の　目　的	3
第Ⅱ章　調　査　の　方　法　と　経　過	4
第Ⅲ章　館　林　の　環　境	6
第Ⅳ章　調　査　の　内　容	9
第1節　多々良地区（成島西部）	9
第2節　多々良地区（日向・木戸・高根西部）	11
第3節　多々良地区（高根東部）・渡瀬地区（西部）	15
第4節　渡瀬地区（東部）・郷谷地区（西部）	21

図 版 目 次

第1図	調査実施地域図	5
第2図	館林市の地勢と現況・遺跡分布図	7～8
第3図	多々良地区（成島西部）の地形と遺物の分布	10
第4図	多々良地区（日向・木戸・高根西部）の地形と遺物の分布	13～14
第5図	多々良地区（高根東部）・渡瀬地区（西部）の地形と遺物の分布	17～18
第6図	渡瀬地区（東部）・郷谷地区（西部）の地形と遺物の分布	19～20

写 真 目 次

写真1	調査風景	3
写真2	多々良地区（成島西部）の景観	9
写真3	多々良地区（日向・木戸・高根西部）の景観	11
写真4	日向地区の古墳	12
写真5	渡瀬地区（西部）の景観	15
写真6	高根地区の古墳	16
写真7	郷谷地区の景観	21

第1章 調査の目的

本市における埋蔵文化財包蔵地に対する基本的な調査は、昭和46年群馬県遺跡地図作成時に実施されたままで、その後環境変化に対する追調査はなされていない。

文化財保護の一つの基礎ともなる遺跡台帳についても同様である。

こうしたなかにあって、現状では、すでに破壊された包蔵地があったり、未周知の遺跡が発見されるなど、台帳自体にもズレがあり、包蔵地の管理や開発行事との調整において、支障が表面化しつつある。

こうした理由から、埋蔵文化財の包蔵地に対し、精度の高い分布調査を実施するものとし、台帳の整備をはかるとともに、今後の埋蔵文化財の保護保存計画を策定することを前提として昭和58年度より調査を開始した。

今回の調査では、ただ単に遺跡の存否という問題だけでなく、館林における地域特色といったものを考える時の素材となれる調査を行うこと、過去から未来に向って託された人間生活に対する現時点での記録となりえることを大きな目的としている。



写真1 調査風景

第Ⅱ章 調査の方法と経過

本年度の分布調査は、昨年の計画変更に基づいた5ヶ年計画の第3年次の調査として、多々良・渡瀬地区を対象として実施した。

又、台地に沿った調査を行なったため、多々良地区の成島東部は調査できなかったものの、郷谷地区・大島地区の一部を調査することができた。

調査の基本方針として、遺物・遺跡の存否のみの確認にとどまらず、地形の確認・地形変化の確認を踏まえた上で、遺物の時期の比定・分布状況の把握を心がけた。また、土地利用者等に耕作時の状況・土地改良の状況の聞きとり調査も平行して実施した。

調査の方法は、遺物の採取・分布状況の確認に先だって、地形の確認・地形変化の確認を行ない、それに基づいて遺物を採取し、分布状況を確認・把握した。

本年度の調査区域を以下、それぞれの地区の小字名で上げる。

多々良地区…水滝・子々ヶ崎・灘・千眼寺・山神裏・鏡山・上網屋・寿崎・松沼町・木車・立花・宿ノ内・谷端・小蓋林・山神脇・新田・向原・門前・台・寺内・前田・新倉・東・五反田・山神裏・梅木山・外和田・下悪途・桜木・鍛治屋田・在家・戸ノ内・寺道・中悪途・道東・道西・広内・上悪途・十二所・中屋敷・榎戸・森ノ木・牛海道・下・定使免・小橋・川垂・台・孤穴・六月免・足森・最ノ神・原・内谷・飯塚・鶴境・村上・稻荷前・中原・新田・起島

渡瀬地区…悪途・安楽・北小路・西小路・舟ノ内・東小路・馬場小路・宮前・能ノ木・鳥井・村西・鹿島・赤城西・宮東・岡崎・榎戸・間々下・村西・八方・田城シ・谷中・宮下・大道北・新倉前・大道南・屋敷前・南・谷中・西原・雷電東・道西・道東・東提通り・村中・石神井・堀ノ内・新屋敷・寺屋敷・登戸・新田・熊ノ木・村東・道西・道上・伊谷田北・伊谷田南・間歩・道下・道東・稻荷木・土井尻

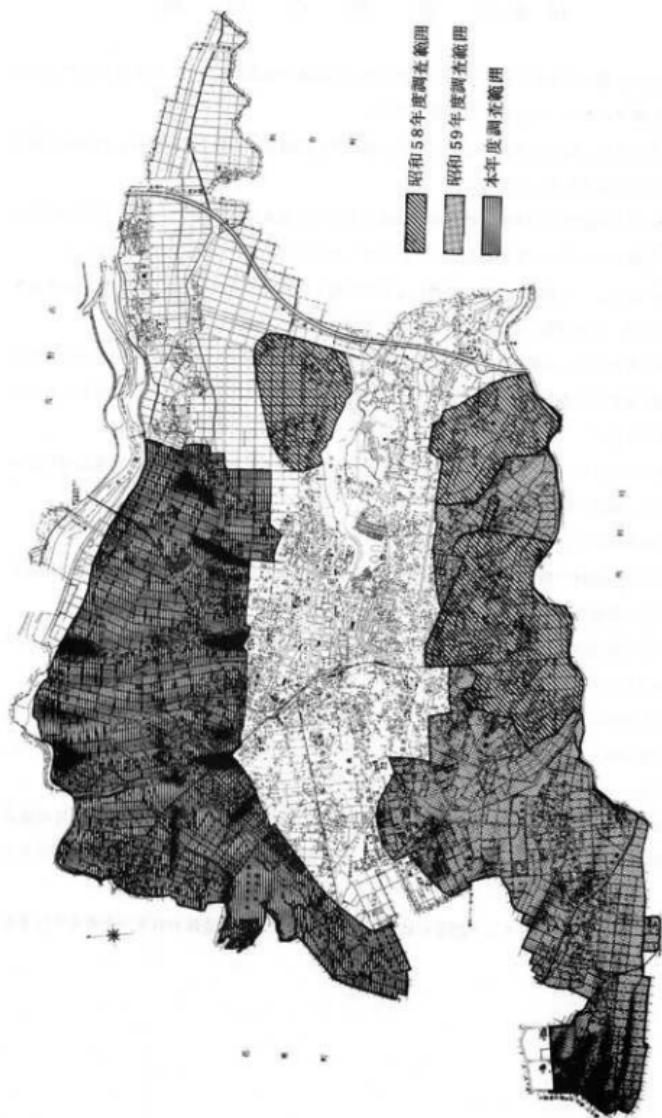
大島地区…土井・正儀内・三本木

郷谷地区…八形・坂下・広内町・広内・大郷堂・八反田・若宮・天神西・細内・青木・龜井道上・龜井道下・高白山

以上である。

なお、各部分は、台地及び池沼によって区切られており、台地にそっての調査を行なったため小字全域の調査となっていない。

第1回 調査実施地域図



第Ⅲ章 館林の環境

群馬県の東端に所在する館林市は、関東地方ではほぼ中央部に位置し、北を渡良瀬川、南を利根川に挟まれた人口7万余人の都市である。

市の中心部は、館林台地と呼ばれる下末吉期相当の洪積台地に載り、周辺は、利根川、渡良瀬川の氾濫原がとりまっている。

館林台地の南側は、関東造盆地運動の北縁にあたると考えられており、現在、浮島状にみえる館林台地もかつては、加須低地をへて、大宮台地と続いていたものと考えられている。

台地の南は、この造盆地運動による沖積地（氾濫原）が広がり、台地の末端を浸食する小支谷が、台地の深くまで入り込み複雑な景観を示している。

台地の西側には、高根砂丘と呼ばれる内陸古砂丘が細長く連なっており、千代田町古海から、館林市木戸に連なる低地帯と合せて考えるならば、かつてここに大きな流路があったことが予想される。

台地の北側には、渡良瀬川の氾濫原が広がっている。台地北側は、南側ほど複雑な様相はみせないが、城沼・鶴生田川の大きな谷が存在している。

台地の南側には、谷頭に、大小の池沼群、谷地を存在させている。

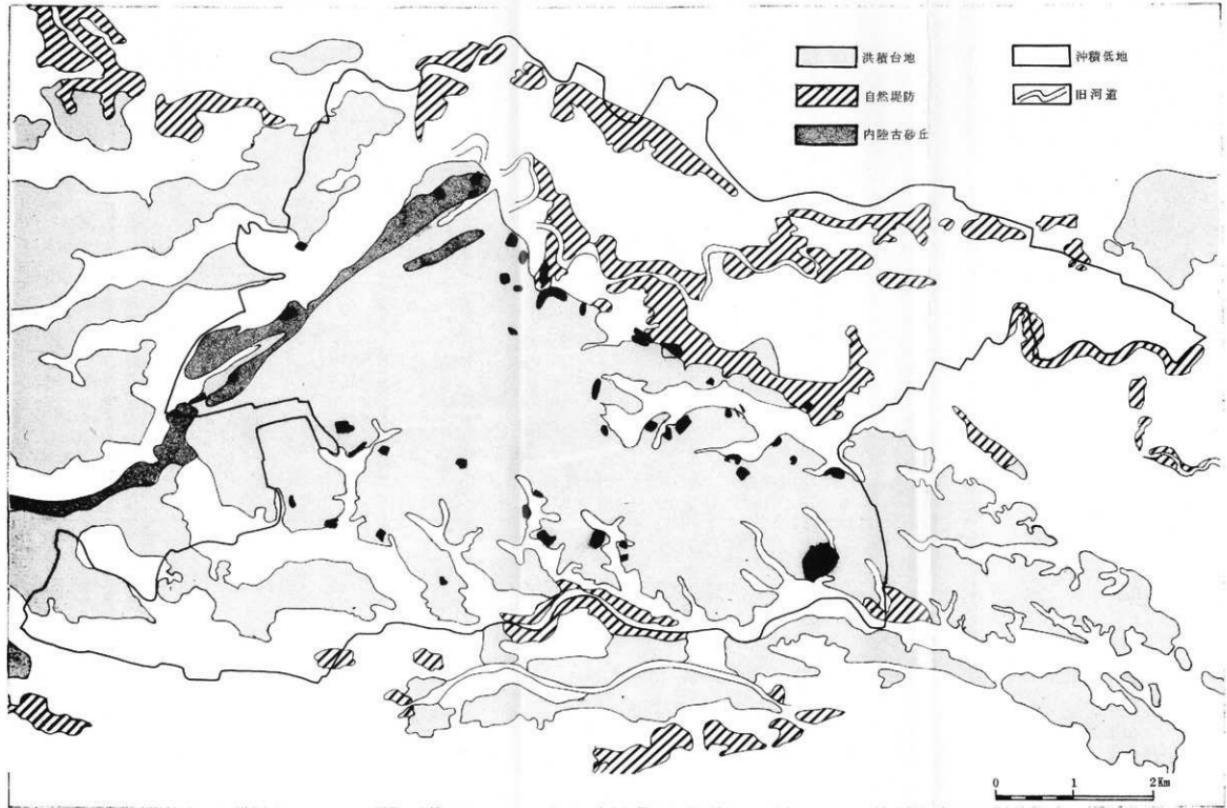
昭和48年の遺跡台帳を見ると、市内に所在する遺跡は46ヶ所を数え、その大半が縄文時代と古墳時代の遺跡である。

その分布状態は、時代的に各沼や、河川と関りを持つように見え、私たちは、これを各河川や沼の名前をとって、文化園と呼んだ。

しかしながら、昭和58年以来実施してきた分布調査の結果や、茂林寺沼のボーリング結果から見るならば、遺跡と地形の関わりは明確ではあるものの地域的な様相はみせないことがわかつた。

遺跡の数は、奈良・平安時代のものだけでも現遺跡数をこえ、その分布状況も、台地の縁辺部のみならず、台地から一段下がった微高地、自然堤防上、台地の深くまで広がって確認されている。

今後、分布調査・ボーリング調査の結果をふまえた上で地形と遺跡の有り方を考えて行きたい。



第2図 館林の地勢と現況・遺物分布図

第IV章 調査の内容

第1節 多々良地区（成島西部）



写真2 多々良地区（成島西部）の景観

多々良地区的成島西部の地形と遺物の分布状況を第3図にあげた。

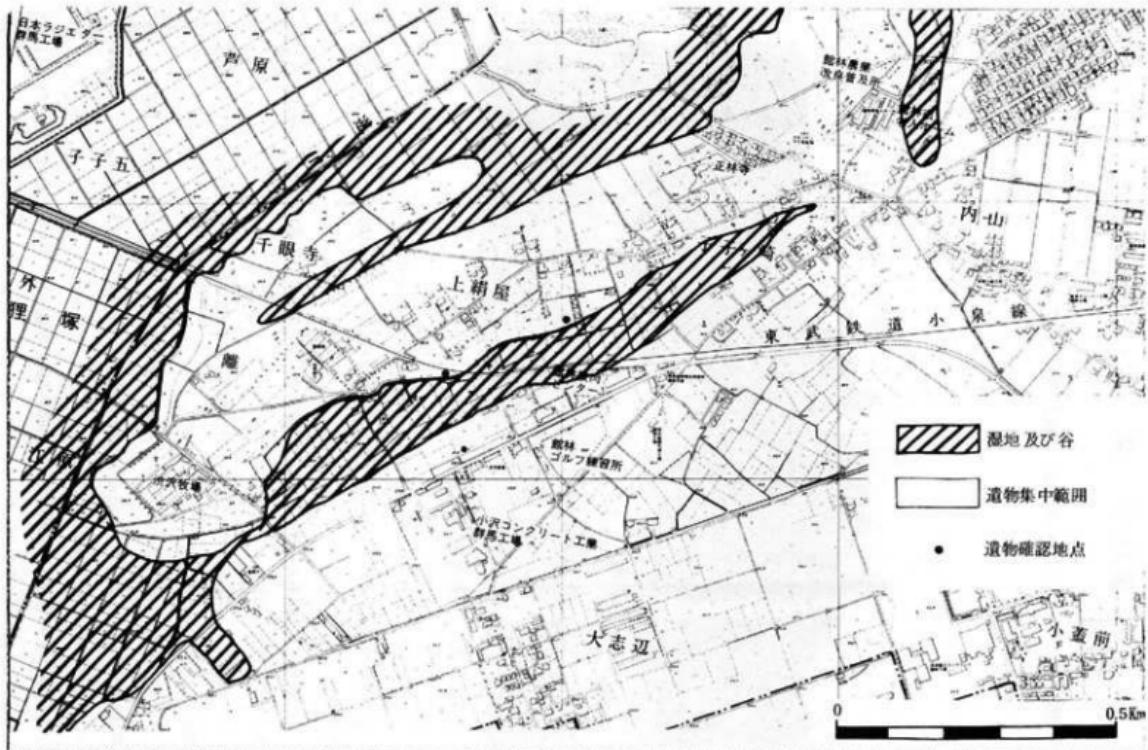
この地域の字名をあげるならば、子々ヶ崎・水溜・千眼寺・離・山神裏・上網屋・寿崎にある。

この地域は、高根砂丘と呼ばれる内陸古砂丘の突端にあたる。古砂丘は、ここで一たんくびれ、再び、邑楽町方面へと連なる。

この台地上は、松林が多く（高根官有林）畠地となっていても、土地改良がはげしく、人工的に、切りとられたり、削られた部分が多い。

そのため、遺物の分布は非常に少なく、離・上網屋地区で土師片が採取されたにすぎない。地形からみれば、古砂丘と、大志辺の台地との間には、やや太い谷が入り込み、又、山神裏から、千眼寺にかけて小支谷が存在する。

上網屋には、昭和46年の台帳によれば上網屋遺跡が登載されていたが、今回の調査では、上記理由から、遺物等は採取されていない。



第3図 多々良地区（成島西部）の地形と遺物の分布

第2節 多々良地区（日向・木戸・高根西部）

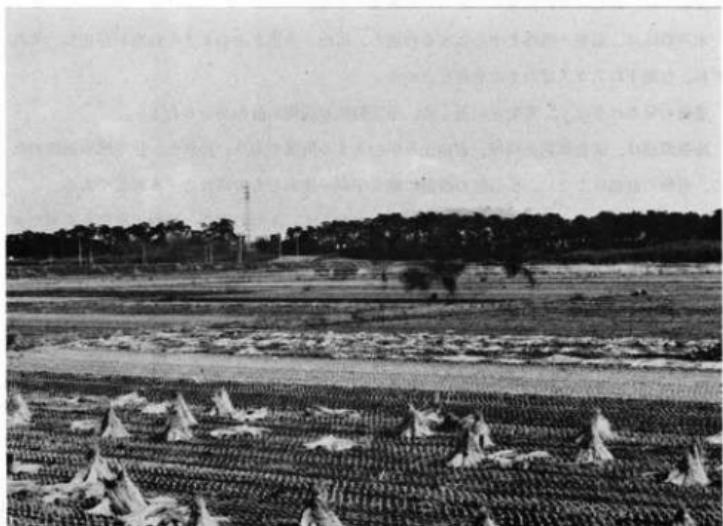


写真3 多々良地区（日向・木戸・高根西部）の景観

多々良地区のうち日向・木戸・高根西部の地形と遺跡分布を第4図にあげた。

字名でいうなら日向は、川垂・孤穴・六月免・牛海道・十二所・足森・台・下・中屋敷・最ノ神・原・定使免・榎戸・鶴境・飯塚・内谷・小橋・森ノ木・中原・稻荷前・村上・起島・新田である。木戸は、中悪途・道東・道西・広内・寺道であり、高根西部は、松沼町・水車・花立・宿ノ内・谷端・小蓋林・山神裏・梅木山・山神脇・台・門前・新田・向原である。

日向地区は、多々良沼の東側に有る台地を中心とする地区である。台地は、台・下・原・最ノ神・飯塚・鶴境と現在の住宅地がならぶ地域と、新田・起島を中心とする2つに分かれる。また、これらの台地の周りには、台地より一段低く、低地より一段高いテラス状のものが広がる。遺跡は、台地上に広がるが、奈良・平安のものは、一段低いテラスにも採取できる。

台・最ノ神に所在する遺跡は、人家のため飛々に確認されるが、本来は一体のものであろう。またこの地域は、上毛古墳總覧によれば、24基の古墳が記録されている。これらのうち、現在も残るものは5基であり、それぞれ5m内外の小円墳である。

起島・新田地区は、多々良沼に面する高台で、たたら伝説が今も伝えられる地域である。実際現日向漁業組合のさん橋下からは、鉛滓が確認できるし、台地上では、中世の土師や瓦の破片が採取でき、起島には、城濠らしきものも確認できる。

木戸地区は、道東・道西を中心とする台地と、広内・寺道を中心とする台地が存在し、それぞれ、台地下にテラス状のものを作成させる。

遺物の分布は少なく、常楽寺の近くに、平安時代の遺物の散布がみられる。

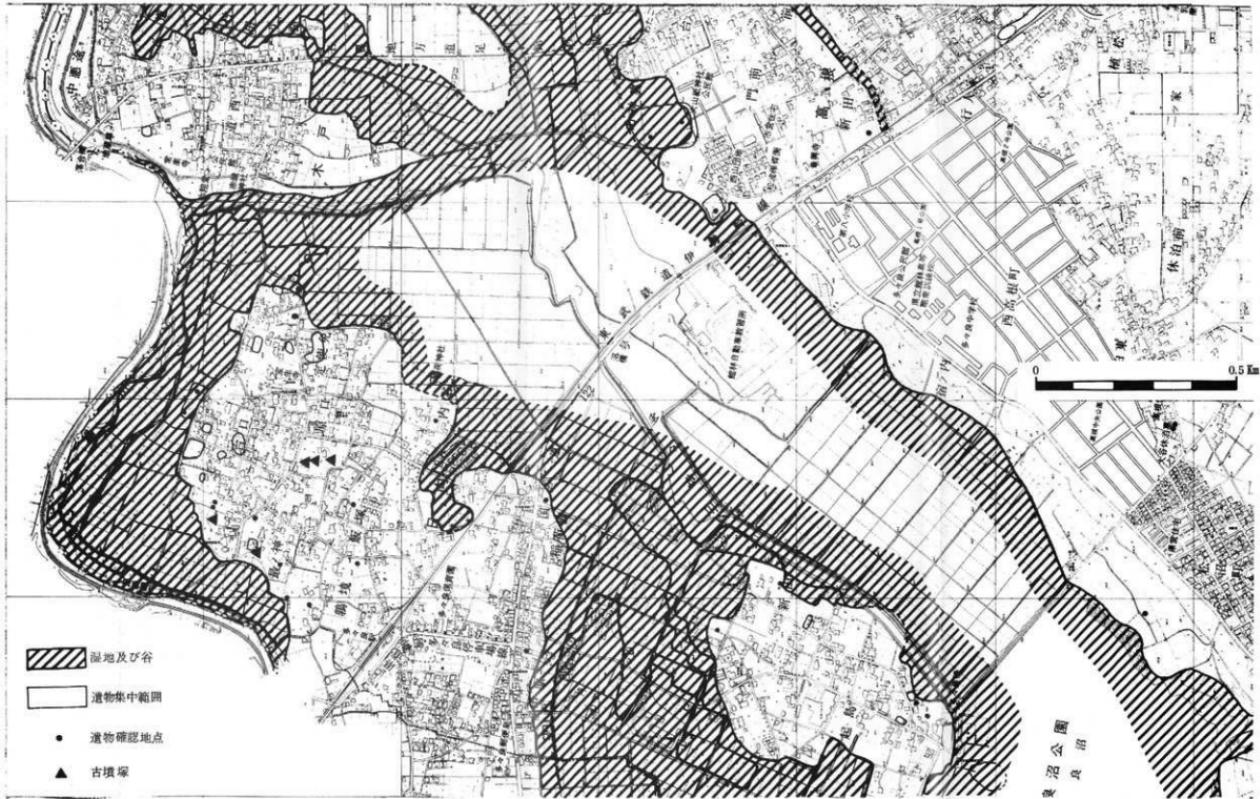
高根西部は、成島西部と同様、古砂丘を中心とする地域であり、松林と、住宅団地造成のため、遺物の散布は少ない。松沼町の西側に縄文中期～後期のものが散布する程度である。

東武伊勢崎線以北は、まだ整地等が行なわれておらず、地形の確認、遺物の確認もややできる状況である。小蓋林・西山団地そばに土師器、黒浜の遺物の確認できる地域が、大山祇神社うらに、加曾利E 3の分布する所を確認することができる。

行人塚付近には、平安時代の遺物が散布する。



写真4　日向地区の古墳



第4図 多々良地区（日向・木戸・高根西部）の地形と遺物の分布

第3節 多々良地区（高根東部）・渡瀬地区（西部）

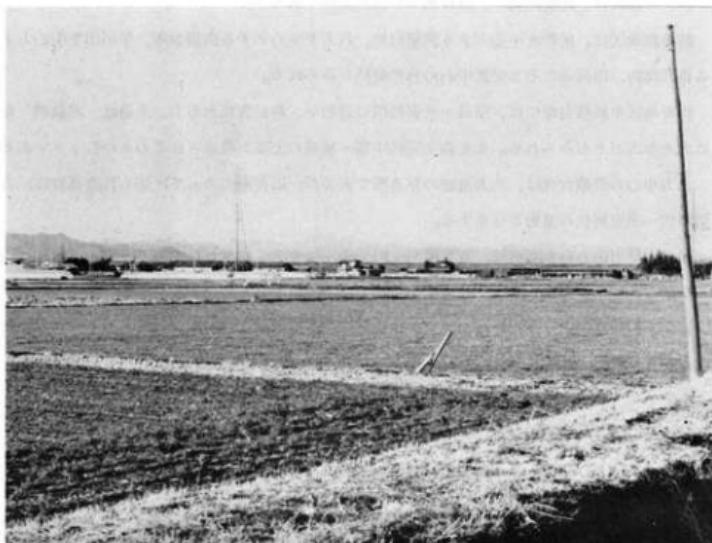


写真5 渡瀬地区（西部）の景観

多々良地区高根東部及び渡良瀬地区西部の地形と遺跡分布を第5図にあげた。

字名をあげると高根東部では、一部木戸を含んで新倉・東・前田・寺内・五反田・外和田・戸ノ内・在家・鍛治屋田・桜木・下悪途である。

渡良瀬地区西部は、悪途・北小路・舟ノ内・安楽・西小路・馬場小路・東小路・宮前・能木・鳥井・村西・鹿島・赤城西・櫻戸・間々下・宮下・新倉前・大道北・大道南・屋敷前・南・田城シ・谷中・西原・雷電東・道西・道東・東提通り・村中・村東・石神井・宮東・伊谷田北・岡崎・堀ノ内・新屋敷・寺屋敷・伊谷田南・登戸・新田・八方・能木・間歩、一部郷谷地区を含んで八形・坂下・広内町である。

高根地区は、寺内・前田・新倉を中心とする古砂丘と、木戸を中心とする台地部分に分かれる。砂丘上には、寺内・外和田を中心として古墳後期～平安時代の遺物を散布する広い地域がある。昭和46年時の台帳によれば、高根遺跡・外和田遺跡であり、今回の調査では1つに連なるようである。又、この地域には、古墳群の存在が、上毛古墳総覧で知られ、今も5基の古墳が残っている。

また、古砂丘下のテラスでは、土師・繩文前期～中期の遺物を散布する地域も確認できる。木戸の高台は、比較的低く、渡良瀬川の自然堤防であろう。

渡良瀬地区は、岡野を中心とする洪積台地、八方を中心とする洪積台地、早川田を中心とする自然堤防、旧河道にそう足次中心の自然堤防がみられる。

岡野地区的洪積台地には、奈良～平安時代の遺物が、地点別に散布し、大道北・星敷前、南に大きな広がりがみられる。また繩文時代中期～後期の土器が確認されるのも特徴である。

八方中心の洪積台地は、八方遺跡の存る所であるが、旧河道によって区切られた高台に、古墳時代～平安時代の遺物が分布する。

足次・早川田の自然堤防は、渡良瀬川、旧矢場川にそって作られたであろうものである。

この高台には、奈良～平安時代の遺物が、点のように散布している。

また、氾濫原中に、島状の高台や、旧矢場川の旧河道のだ行のあとが観察されるのも、本地域の特徴でもある。



写真6 高根地区の古墳

6167. 高根

第5図 多々良地区(高根車部)・源澤地区(西部)の地盤・土壌物の分布





第6図 渡瀬地区（東部）・郷谷地区（西部）の地形と遺物の分布

第4節 渡瀬地区(東部)・郷谷地区(西部)



写真7 郷谷地区の景観

渡良瀬地区東部と郷谷地区西部の地形、遺跡分布図を第6図にあげた。

調査区域を字名であげると渡良瀬地区東部は、道上・道下・道西・道東・道下、一部大島地区を含んで、土井・正儀内・三本木である。

又郷谷地区では、広内・八反田・土井尻・大御堂・若宮・天神西・細内・青木・亀井道上・亀井道下・高白山である。

この地域は、氾濫原中に続く、自然堤防である。早川田地区は、渡良瀬川の、郷谷・大島地区は、旧矢場川の自然堤防であろう。比高は、約1mを計る。

早川田地区には、遺物の散布はみられない。

広内地区から、細内・三本木にむけて旧河道が確認され、これに伴う自然堤防上には、平安時代の遺物が、点のように散布している。

館林市埋蔵文化財調査報告書第14集

館林市埋蔵文化財分布調査報告書(3)

発 行 館林市教育委員会

印 刷 所 オーラ印刷有限会社

発行年月日 昭和61年3月31日



文化財愛護シンボルマーク
歴史の文化と歴史あるなまう